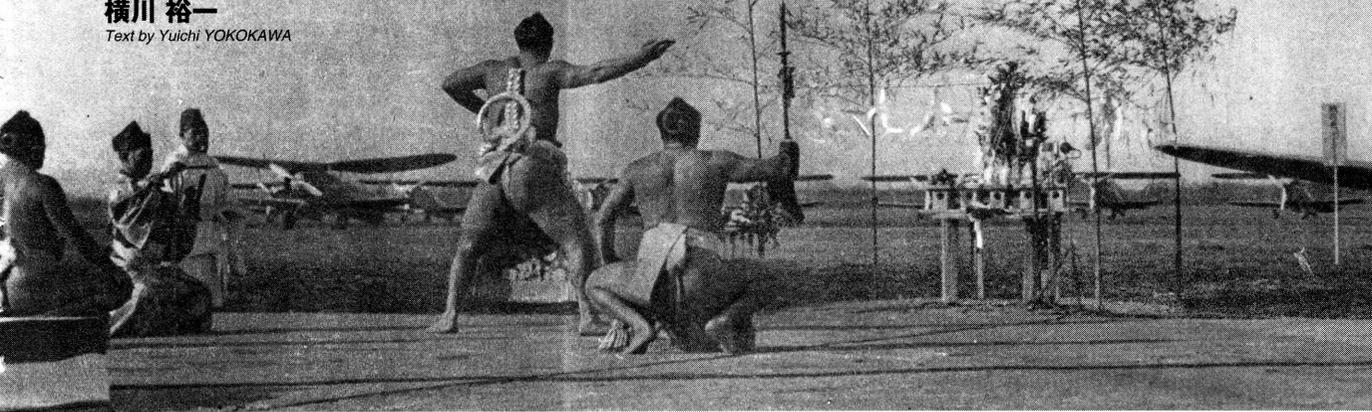


# 愛国号献納調査報告

## ～番外 グラフ編～

横川 裕一

Text by Yuichi YOKOKAWA



過去4回にわたって、本誌に記事を掲載させていただいた。編集部のご好意により、さらに番外として写真を掲載する機会を得たので、過去に発表される機会の少なかった写真を中心に、披露させていただこう。

その前に、これまでの連載の訂正を以下に示したい。その1（2011年10月号）P.87本文中段の「愛国130・131号」を「愛国131・132号」に。

右は愛国7「群馬」号（九一式戦闘機）の独立飛行第3中隊への授与式の模様。昭和7年4月10日、上海の公大飛行場（公大大学校庭）。写真では、向かって左奥に甲式4型戦闘機、中央奥に九一式戦闘機が見える。

本機は3月8日に高崎で命名式が行なわれており、中島飛行機の地元ということで急遽献納活動が進められた。県民号の第1号である。

（写真提供：柳沢光二氏）



上は昭和7年4月10日の代々木練兵場で行なわれた命名式の各機。手前左から、愛国9「河野」号、11「長岡」、12「立山」号。奥（画面左端）は愛国10「朝鮮」号。

左は、愛国9「河野」号と献納者である河野義氏の一家で、子供を抱いている軍服姿が献納者の河野氏。ラジウム温灸器の発明者で、東京理学療院の院長でもあった河野氏は、戦後、十全の号で有名。



昭和7年4月24日、姫路市の城北練兵場での命名式における各機で、左から愛国18「第十師管山陰」号（九一式戦闘機）、愛国19「兵庫」号（八八式軽爆撃機）、愛国17「岡山」号。第十師管とは第十師団管区のこと、岡山、鳥取、島根県の一部を指す。

愛国19「兵庫」号については、昭和7年兵庫県教化団体連合会発行の『軍用飛行機献納記』に、献納経過や命名式の様子が掲載されている。

愛国28「徳島」号（八八式軽爆撃機）。  
本機の命名式は、昭和7年6月5日、徳島県は板野郡上板町高瀬の吉野川河川敷特設滑走路で行なわれており、左はそのときの一葉。  
(写真提供：徳島新聞社、阿波勉強堂)



愛国39「信濃」号の命名式会場にて（昭和7年7月17日、上田飛行場）。エンジンを覗き込んでるのは、地元紙の新聞記者だろうか。



昭和7年10月12日、熊本市帯山練兵場での命名式における愛国50「熊本」号。

本機は昭和7年9月、中島飛行機製造の九一戦173号機である。方向舵に、「昭和七年九月」とあるのがお分かりいただけるだろうか。





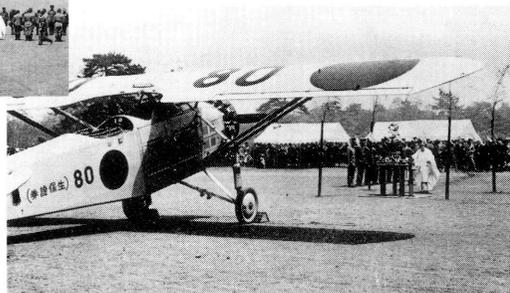
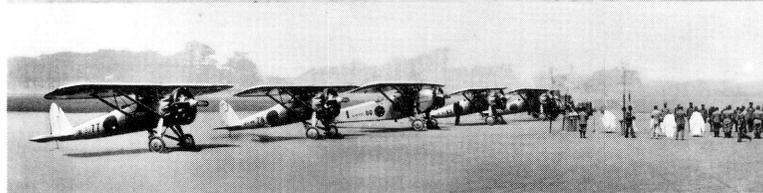
この写真の愛国号は愛国50番台までしか読み取れないが、上の写真はかなり高い位置からの撮影であり、格納庫の屋根からとすれば、右下の格納庫形状と併せて、該当するのは愛国54「岐阜」号、昭和7年9月18日の各務ヶ原における命名式となる。

同機の献納運動の様子は、『献納者芳名録』（帝国在郷軍人会岐阜支部、昭和7年）に詳しい。



昭和8年5月14日、代々木練兵場における愛国77「三越」号。三越デパートからの献納で、同機の命名式の様子などは『三越號 陸軍愛国第七十七號 海軍報国第八十一號 献納記念写真帖』（昭和11年）に詳しい。中央の軍服姿は荒木貞夫陸軍大臣。

左下は同じ命名式の全体写真。手前から77「三越」号、78「日清紡績」号、80「生保証券」号、83「東電」号、85「全国民」号。



右写真はそのうちの愛国80「生保証券」号（九二式偵察機）。  
（2枚とも『国防献品記念録』より）



左2枚は愛国88「通運」号の命名式（昭和8年7月26日、東京 代々木練兵場）において。花束贈呈役の女性が、洋装であるのが珍しい。

対照的に、右写真では、機体の向こうに艶やかな姿のお姐さん方の姿が見える。同時に献納された愛国91「川村」号は新橋芸妓屋組合頭取の川村徳太郎氏からの献納であり、その関係者と推察される。（写真提供：柳沢光二氏）



上は岡山県児島郡入江町の帝國足袋株式会社（現トンボ学生服）からの献納で、愛国430「アサヒトンボ」号、昭和15年の命名式の記念絵葉書から。三宅社長と久高操縦士とある。

プロペラにバチンコ始動式のヒモが見えている。ここで始動予定だったのだろうか。



上は野村銀行代表取締役頭取の野村元五郎氏献納の愛国294「野村」号、九七式司令部偵察機。命名式の期日は、まだ不明。九七式偵の愛国号としては、愛国131、132、愛国170～179「全日本」号に続く、3番目の献納である。

小写真は、献納記念写真の額。その大きさは69×56cmと大きく、献納関係者の所有物であったものと推察される。



昭和7年1月6日、10日に挙行予定の代々木での命名式準備のため、愛国2号が立川に飛来した。本写真の背景に写る機種（九二戦、八八偵、九一戦）の多さから、立川での撮影と考えられる。（世界堂のプロマイドより）

吉海

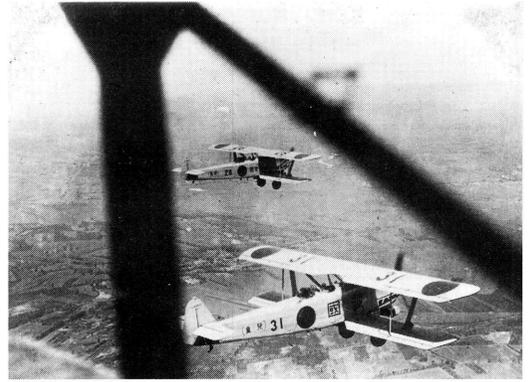


福井県民献納の、愛国14「若越」号（九一戦）。見えにくいですが、主翼上面にルバロアの射撃監督写真器を積んでおり、飛行学校での撮影と考えられる。本機は昭和12年9月に廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却となった。

（写真提供：金竹久智氏）

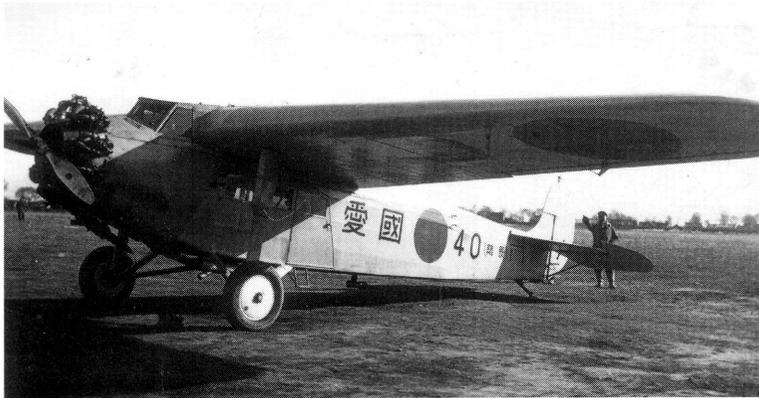


愛国19「兵庫」号。本機は、陸軍書類「国防献品飛行機現況送付の件」(昭和8年4月調べ)では、関東軍に配備されていることが判明している。主翼下面には爆弾架が見え、背景の地平線と合わせて、任地の満洲での撮影と思われる。(写真提供：夏谷克彦氏)



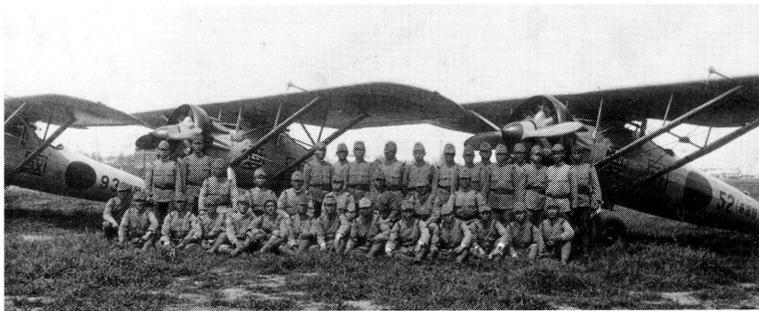
飛行中の愛国31「児童」号と28「徳島」号(奥)。ともに、飛行第10大隊第2中隊機。愛国31号は、昭和8年9月21日、新京(現 中国長春)で不着着・大破しており、それ以前の撮影だろう。

ちなみに、愛国31号は、愛国22「帝生」、23「中学生」、24「三井鉱山」、30「女学生」の各号とともに、昭和7年6月19日に所沢で命名式が行なわれており、所沢での命名式はこの日が最初である。



第5師団管区下官民献納の愛国40「防長」号、フォッカー・スーパーユニバーサル改造の患者輸送機。本機は、飛行第10大隊第1中隊に配備された。

『満洲事変 国防献品記念録』によれば、献納時の金額は75,000円である。

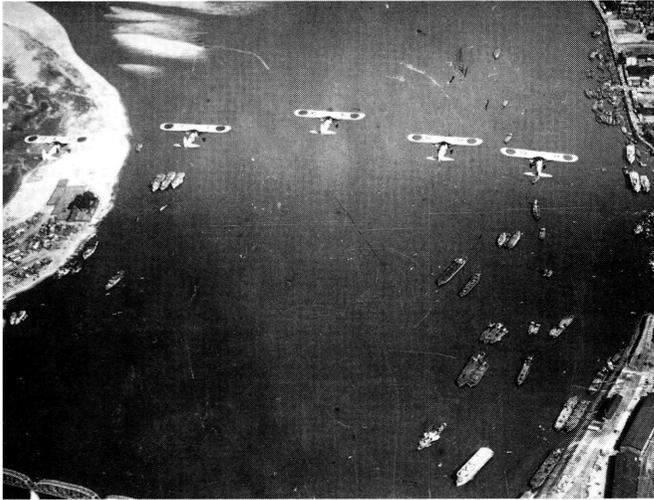


左は飛行第11大隊の九一戦愛国号。画面右端は、愛国52「新潟県」号、左端は愛国93「福岡市」号。満洲での撮影だろう。新潟県号は低圧タイヤを履いているのが分かる。



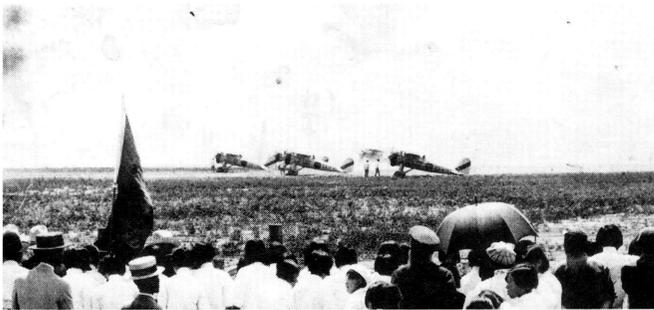
雪景色の中の愛国62、63「満洲」号。両号の命名式は、昭和7年11月27日、満洲国の首都・新京(現 長春)で行なわれた。

愛国63号は翌8年1月9日、飛行第11大隊の古寺軍曹操縦により帰還中、天候険悪・視度不良により愛国29「北海道」号と衝突し、両名殉職となった。



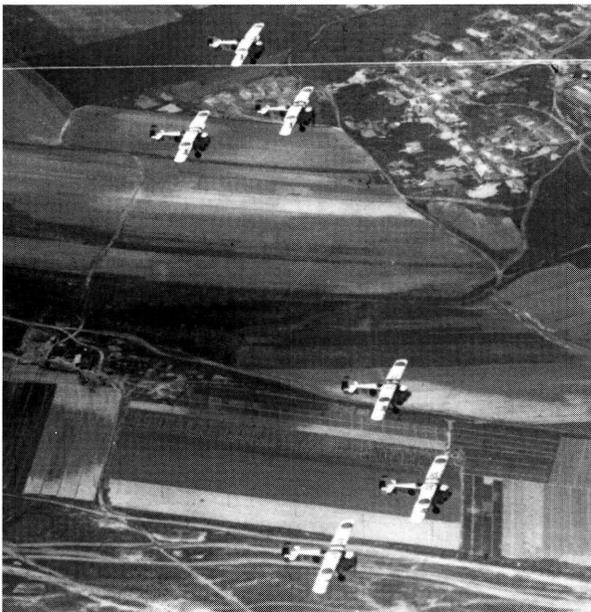
左はハルビンの松花江上空の九一戦愛国号。左から、愛国17「岡山」号、7「群馬」号、41「愛媛」号、52「新潟県」号、39「信濃」号の各機。7、41、52、39は胴体に帯があるように見え、所沢の九一戦2型胴体に薄っすらと見える青帯と同じように思われる。

左下はハルビン飛行場における飛行第11大隊機。見える機体はすべて愛国号で、右端は愛国83「東電」号のようだ。飛11大隊の九一戦装備部隊標識は、ここに見える垂直尾翼の斜め太帯である。(当時の絵葉書より)

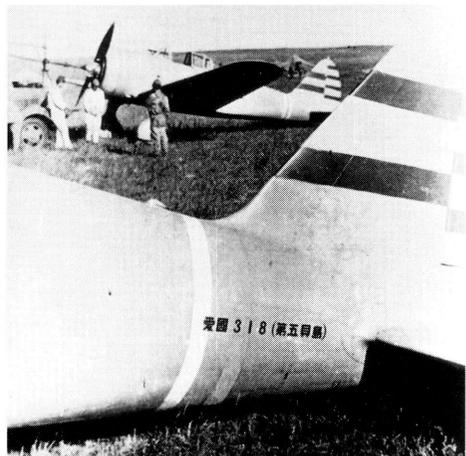


下は飛行第11戦第1中隊の長谷川智在少尉と、愛国325「東京鋳物」号。先月号に本号の消息を記したように、昭和14年6月に命名式が行なわれ、飛行第11戦隊に配備された。同隊の稲妻の部隊標識（白が第1中隊）と胴体帯（赤？）が見える。（『陸海軍戦闘機献納報告書』より）

下は飛行第4連隊（または独立飛行第4中隊）の部隊標識をつけた、愛国120「文明埼」号（九四式偵察機）。胴体に日の丸をつけていることから昭和12年2月以前の撮影であり、短胴の甲型に見えることから、初代と思われる。  
(写真提供：夏谷克彦氏)



上は飛行第11大隊の九二戦編隊で、先頭機が愛国92「横浜」号である。飛11大隊の九二戦装備部隊標識として、方向舵の彩色に加え、主翼にも帯が入っているのが注目される。



右上は長崎県貝島炭鉱からの愛国318「第五貝島」号。愛国315「第一貝島」、316「第二貝島」、317「第三貝島」と続き、四を嫌って、318「第五貝島」と命名されている。写真は満洲の飛行第24戦隊にて昭和14年8月に撮影されたもの。本機は、森本重信大尉の第2中隊に配備され、斉藤千代治曹長機としてその初陣にて、イ16とLZ機(?)の各1機を撃墜したと、陸軍の発表にある。また、その後、第2中隊を引き継いだ代永兵衛中尉、西原曹長の使用機となって、計49機の撃墜戦果を重ねる武勲機となった。